

地域で子どもが巻き込まれるトラブルの発生メカニズムと その対応策に関する検討

鳥居塚 崇（日本大学生産工学部）

An Investigation of the mechanism of the trouble which a child encounters in the society and the countermeasure for the trouble

Takashi TORIIZUKA (College of Industrial Technology, NIHON University)

1. はじめに

安心・安全の観点から子どもの人間工学を考える場合、製品安全や環境整備の問題、あるいは保護者と子どもとの関わりの問題が取り上げられる機会が多いが、ここでは子どもを取り巻く領域をさらに広くとらえ、「地域」における諸問題と、その問題に取り組む方策について検討していく。その上で、子どもを取り巻く地域社会のレベルで、人間工学が取り組む問題について考察することを目的とする。

2. トラブルに巻き込まれるメカニズム

子どもが地域でトラブルに巻き込まれるメカニズムを図1に示す。ここでトラブルと言っているのは、文字通りのトラブル（事故・事件を含む）と、さらにトラブルの被害が拡大した状態を示す。

図1は産業分野等における事故発生メカニズムを基にしたものであるが、まず、子どもの行動が不安全行動となった場合（あるいは外的な力によって不安全な状態になった場合）、トラブルに陥ることのないよう防護策を設けることによって、不安全な状態がトラブルに発展することを防ぐことは可能である。しかし、防護策で救われなかった場合、それはトラブルに発展する。トラブルが発生しても、その対応がうまくいけば被害は拡大しないが、うまくいかなければ被害はさらに拡大する。

子どもが巻き込まれるトラブルの場合、トラブル発生後の対応がうまくいかなかったために被

害がさらに拡大し、致命的なダメージに陥ることもしばしばである。

3. トラブル防止の考え方

地域において、子どもを巻き込むトラブルは、不慮の事故と犯罪に大別して捉えることができるが、図2に示すように防護策に救われれば事故や犯罪には巻き込まれずに済む。不慮の事故の防止を想定すれば、安全設計や安全な環境の提供が防護策となり得、犯罪を想定した場合は防犯や、加害者が加害しにくいような環境作りなどが防護策となり得る。

しかし、たとえ不慮の事故や犯罪に巻き込まれたりしても、速やかに発見され、また、適切な対応がなされれば深刻な被害は免れる可能性もある。

トラブルを早期に発見できなかったり適切な対応がとれなかったりした場合、トラブルの被害は深刻になる。しかし、トラブルを早期に発見し適切に対応できたとしても、そのトラブルが子どもに与える影響は著しく大きい。したがって、その後の対応やケアの方法を誤ると回復が遅くなる。

以上、トラブルが発生することを想定し、その対応策について検討したが、そもそも、子どもの行動が不安全行動になったり、外的な力によって不安全な状態になったりすることをある程度防ぐことができれば、結果としてトラブルに発展する可能性も少なくなる。そこで重要な役割を担うのが、家庭や学校での教育やしつけ等である。

これらをまとめると表1のようになる。

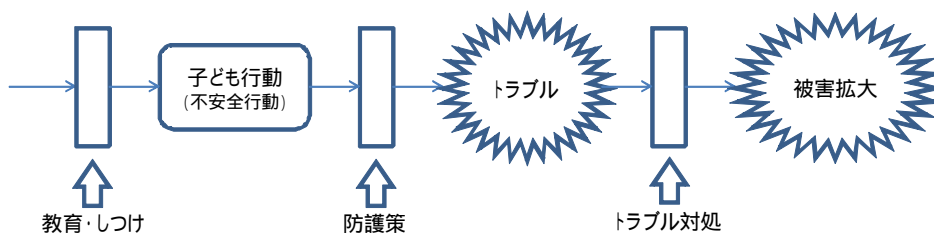


図1 地域で子どもがトラブルに巻き込まれるメカニズム

表1 トラブル防止の考え方

不慮の事故や犯罪に巻き込まれないようにするための環境作り，防護策の構築
早期発見と対処
当面の対応とケア
家庭や学校での教育・しつけ

4. 人間工学の役割

表1をもう少し抽象的に見てみると，以下のよう
に集約できる（表2）。

表2 対応策の指針（～ は表1に対応）

トラブル抑止
トラブル緩和（早期発見と対処）
ダメージ軽減（当面の対応とケア）
不安全行動，不安全状態の抑止

ここで，人間工学が大きく活躍するのはとくに
である．不慮の事故の対応策としては，ものや
環境を子どもの行動特性に応じたものにする必要
があるし，犯罪の対応策としても，加害者が加害
したくなくなるような環境を構築する必要があり，
いずれも人間の特性を踏まえた対応策が必要とな

るからである．しかしながら，不慮の事故を防止
することに重点を置きすぎると，結果的に危険を
体験せず成長する子どもが増加する．子どもの
発達・成長を考慮しながら，長期的視点で対応策
を検討する必要がある．そう考えると，より大
きな役割が期待されるのが である．防護策にす
べてを委ねるのではなく，子ども（あるいは子ど
もと保護者）自身で，ある程度自衛することも重
要となる．また についても，トラブルを早期
に発見できるような情報の与え方を考える上で，
人間工学が重要な役割を果たし得る．

地域で子どもが巻き込まれるトラブルを防ぐ，
ということ人間工学が関わる分野かどうか疑問に感
じることもあるかもしれない．しかし，そのメカ
ニズムに着目して詳細に検討すると，人間工学が
貢献できる余地は大いにありそうである．

謝辞

本稿の基となる考え方は，子どもの人間工学分
科会の防犯WGのメンバー（村山友：セコムIS研
究所，横矢真理：子どもの危険回避研究所，鳥居
塚崇），および子ども分科会座長小松原明哲先生
によるディスカッションによるものである．防犯
WGに関わった先生方に謝意を表します．

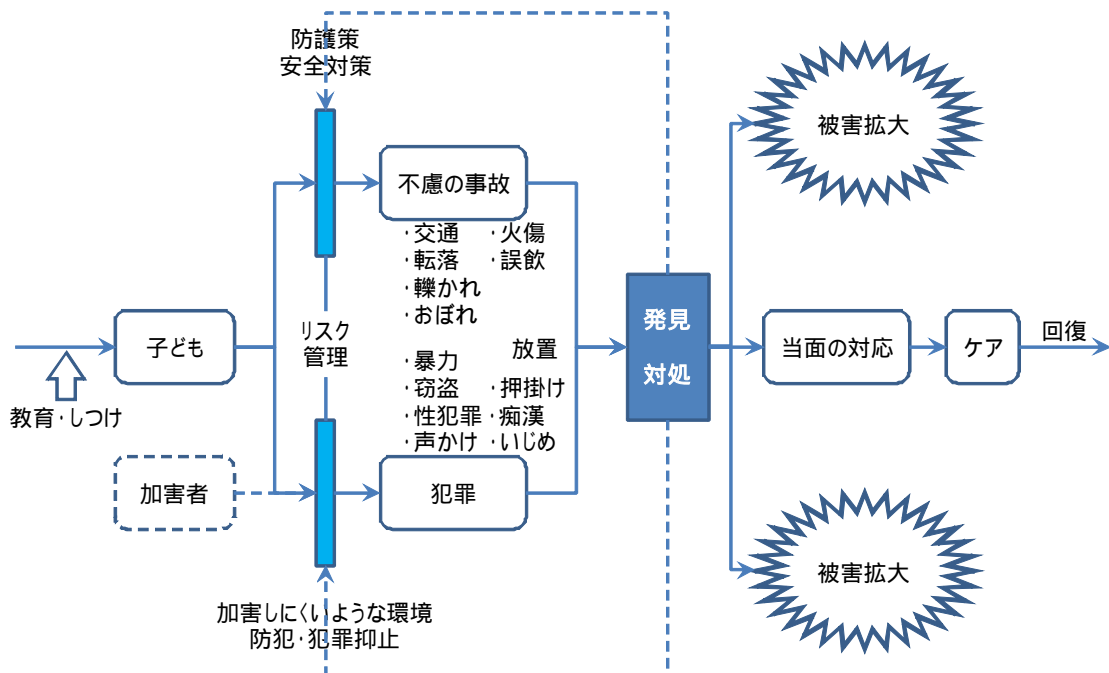


図2 地域で子どもがトラブルに巻き込まれるメカニズムとその対応策